



The following texts are part of an opera : « 娘 rrespondence » , directed and produced by David G. Hebert and Eric Van Hove. It have been performed in February 2002 in Tokyo. Therefore, these texts remains the intellectual property of Eric Van Hove, no publications without authorization.

*Email : evh\_transcribe@yahoo.com*

<http://www.transcri.be/correspondenceJP.html>

<http://www.transcri.be/>

Copyright©Eric Van Hove

英語のバージョン:

<http://www.transcri.be/Correpondence-englishtexts.pdf>

フランス語のバージョン:

<http://www.transcri.be/Correspondence-textesfrançais.pdf>

娘 rrespondence I.

0 へ、

東京、2002年1月13日

私たちのような西洋人は、古代ローマ人の子孫で、ブルグンド族、西ゴート族、東ゴート族におかされたものの子孫は、千年近くのキリスト教文化も結局は火

に油を注ぐことしかしなかった異教の大饗宴の豊かな文化を通して、商人の言葉、政治家の言葉、うそつきと詭弁家の言葉を話す。そのことを忘れてはならない。26文字は誤謬や過不足ない表現が可能であるアルファベットを形成する。その冷淡な効率の良さはアルファベットが最初商人言葉としての性格を持っていたことを示している。

初期の文字はシュメール人の楔形文字であったが、その後ウガリト市やバビロニア市で発展した文字が22のフェニキアアルファベットを形成し、それをもとにラテン文字そしてヨーロッパ文字が生まれた。その唯一の目的は地中海での貿易だった。精緻な言語はまるで数字を並べるように書くが（フランス語でメッセージを解読することを「数字をばらばらにする」と言うではないか）、豊かな詩作も可能にする文法をも備えている。「オー」の音をフランス語では3通り書くことができる「o」「au」「eau」（ところでフランス語の「eau」という言葉はなんと美しいことか。この3つの文字をばらばらにしたらそれぞれの発音は3つ合わせた時とはまったく異なるが、3つを合わせるとなんとも言えないニュアンスが生まれ、それは「水」という言葉となり、その言葉のもつ微妙なニュアンスを伝えるようになる。）

日本語では「オー」と発音する文字は37文字もあり、それでも日本語としては少ないほうだ。26文字の言語は日本語で書くことのできるどのような言葉も難なく書くことができる。アルファベットを使う国では8歳の子供でも正しい音で文章を読むことができるが、日本語の場合、ひらがなとカタカナで71文字、加えて漢字が何千とあり、日本人はそれらを使っても僕の名前を正しく発音することができない。ラテン語、商人の言葉、商人詩人のことば、詭弁家商人のことば。少なくともそこで違いがあるのは、西洋人は断言をし、日本人ははっきり物事を言うことができない。理由がなくとも売り込みのできる商人と理由はわからないがノーと言えない顧客の意志疎通の無い出会い。

エリックより

## 娘 rrespondence II.

美しい人、

Tokyo, January 23, 2002

そぞろ歩いた。君のことを考えながら。哀愁が茶色の短く刈られた芝生に広がる。茶色の、金色の、たばこ色のざらざらした芝生は動物の皮のよう、母なる大地の乾いた頭皮。ぼんやりと眺めると真っ青な空。あちらには色には目もくれぬ雲がもくもくと立ち上がる。まるで海の化け物を威嚇するため入れ墨をしていたという和の国の潜水夫のように。風に震え、雨を溜め、積雲が立ち上がる。

マルコ・ポーロは著書(東方見聞録)の中で日本を「ジパング」と呼んでいたのを知っているかい?この本をクリストフ・コロンブスもカラベル船に乗せて持参したそう。金と宝物のあふれる国ジパングにマルコ・ポーロ自身は脚を踏み入れたことがなかったらしい。

しかしこの名はまるで、ランボーの筆で描かれるザンジバルのような響きを持つ。その語り口が似ているからだろう。アルチュールは書いている:僕はザンジバルにも他のどこにも行くことはないだろう(1887年11月5日の手紙)

少し前に僕は箱根に行った。富士山のふもとの湖畔だ。4年前、この湖と山と、緋色の弧線の写真を見たのを思い出した。これを見て僕は日本、ジパングに来ようと思ったんだ。突然浮かんだ考えはずっと僕につきまとった。そのことを少し忘れていた。富士山のふもとを歩くことになって、僕はその写真のことを思い出した。僕はその写真の中を歩いた。思いがけず、達成感を感じる。美術館の入場券に載ったその写真を君に見せよう。

相對(あいたい)

エリックより

\*Ancient Chinese name given to Japan (2000 years ago)

娘 rrespondence III.

モーリスへ、

京都、2001年8月12日

暑い。普通は体の外の方が体の内側より涼しいはずだ、特に湿度は低いはずだ。でも、日本の夏のこの時期は違う。尿のような、暑い、湿った空気が体を太陽光のごとく包み込み、肌をなめるが感覚は無い。体の境がどこかわからない。夏は僕の肌の上に、中に、下にある。それゆえ僕の肌は「肌である」意味を少し失う。それについては言うことはそれだけ。

日本の女性は、高くて細いかかとのハイヒールで身を高くする。小さいことへのコンプレックスがその理由らしい。でも別の理由もあるようだ。細い靴は脚を守ってくれず、ひっきりなしにぶつかる。だから彼女達のほとんどは足、ふくらはぎ、脚の下部から腿のつけね、ひざの上まで、傷つき、青あざがある。彼女達の脚は丈夫で強い。「つま先立ちのようにして」いつも歩いているから。常にこすれる部分には魚の目ができる。脚は西洋美が求める制約の形を取り、歪み、はれる。それが女の足だ。僕にはある考えがうずくように徐々に浮かんでくる。高いハイヒール、そのほとんどがか細く、アキレス腱の下にぶら下がっているヒールは、日本女性の「現状」を表しているように思える。とがった先に身を置き、身を高め、彼女達は自分には無い脚をまるで作り上げなければならないと思っているかのようだ。彼女達の土台は今にも折れそうな棒、常に転びそうだ。

この「今にも転びそうな風情」こそが、男性の興奮を呼び起こす、少なくとも呼び起こすはずのこの種の靴のねらいなのだろう。拷問のようなもの、強制されたアンバランスは同情を、そして哀れみをさえさそう。びっこにされ、かよわくされた、そのようなものを身につける女性や、時には男性は、邪悪な影のもと開始される狩の獲物だ。誰もが知るように、美しくかよわい不具者を見ると、しおれさせ、中傷し、壊したくなる。そして美しくかよわい不具という定義の中に、性の生々しさが、存在の根拠や自らの姿を見いだす事も我々は知っている。地面との接触が益々希薄になり、逃げようとしているのか、それとも逃げ道を閉ざそうとしているのか、この地震の多い国で一センチ角の土台の上の高みにとどまる日本の女性は、悲惨だ。そして戦後日本、戦後から抜けきれない日本に呼応した暗喩に富んだヴィジョンを与えてくれる。

友情を込めて、

エリック・ヴァン・ホーヴ

娘 rrespondence IV.

ドミニクへ、

東京、2002年6月10日

日本人達は眠っている。

歩道の角、大衆が押し戻される場所、時には移動の神経質な流れが人々の足を止め、ショック状態のように、数分間の平安を得て人々は穏やかになり、バスや電車の中で、日本人は眠る。

彼らはただ休んでいるのではないように僕には思える。頭は重みで垂れ下がり、頬は重い。退屈な現代性に幻滅したヒーローが、添え木となった物体によりかかる。眠りの方が突然彼らを襲い、彼らを宙づりにする。結局は受け入れられることになる矛盾のうねりに揺られ、定期的に幻滅がおこすローリングに揺られ、自分の親密な空間が常に多くの他人のそれと擦れ合い、彼らは眠る、気遣いですり切れた魂、疲れた表情の平安。

歌舞伎の大御所中村富十郎も言った事だろう。「疲れや努力をごまかしてはならない。役者の芸とは天の創造物の羽衣と同じで、目に見える繕いがあるてはならない。」と。現代日本社会の繕いは目に見える。そして創造物達が持つ唯一の天上のものとは、彼ら人間の条件として与えられた永遠の悲劇のみだ。その悲劇は日常としてあり、水たまりの美と同じように目にはつかない。

もののあわれ」と日本でいうものと同じ響きをもつものに、クリスティーヌ・ビュチ・グルックスマンがその著書「日本の時間の美しさ」の中で「新イカロス主義」と言うところの、寝る時間がある。

メルロ・ポンティは確かよれた襟にエロティズムを感じると言っていたと思うが、それと同様に、天照大神の現代の臣下の隈のある顔やシワの寄った額、疲れ切った肩に内在する不動のものを僕は見ることができる。

友情を込めてエリック、

娘 rrespondence V.

東京、2001年6月26日

とりとめもなくしたためます。君は「日本が気に入らない」と言ったね。僕は益々好きになってきたよ。

夜、街の明かりはとても特殊で、ここで使われる資材はどこまでも平凡だけれど、光を奇妙に、優しく、ぼんやりと反射し、ほとんど信じられないほどだ。

通りの幅はまるで彫刻を「成している」かのようだ。

どこか均整が取れている。

何に釣り合いが取れているのかそれははっきり分からない。君も知っているけど、ここは地震が多い。

都市づくりにもそれは影響している。家と家の間はひっついておらず、すき間を隔てて隣り合っている。

用心のためなのだろう。一軒倒れても隣が倒れないように。それに家々が離れていれば、揺れても大丈夫だ。

それらが美しい場所を作り上げる。家と家の間の割れ目、

すき間、空いた傷、広げた脚のような家々。

それらの空間はまるで彫刻のようだ。

人が通るには狭すぎるすき間。忘れるには広すぎ、見捨てるには便利すぎる。

多分他の国でもそうなのだろうが、アジアのこの国では雑草は大切にされている。

その雑草が人が入れない所にどんどん伸びる。最も驚くのは、そしてきっと理

にかなっていることなのだろうが（多分双方とも同じことだろう）、日本の家に言えること

が日本人にも当てはまるように僕には思える。彼らの間に空間があり、空間は揺れを思い起こさせる。

友情をこめて

娘 rrespondence VI.

親愛なるモーリスへ

東京、2001年12月 8日

葉書に書かれた君の文字をみて喜んでいきます。

友人よ、師よ、日本女性のそれは西洋の女性のように膨らんだカーブや自由奔放な丸みの大食漢のような攻撃性は持っていない。見逃すことのできない山よりも、何かを探索する畑のようだ。

それは平らで、目でその存在を確かめるのがやっと、手でその不足を探るのがやっと。しかし肌の張りは慎みやかに到達の企てに対して開かれ、このわずかな存在が豊満以上のものとなる。ちょっとした勾配、わずかな厚み、ほとんど見つからないものほどやっきになって探すもの。

日本の乳房のほのかな気配を感じる。

目は、まだ僕はどっぷりはまりこんでいて、君に話すことはできない。

話をすることによって、かえって始めに受けた衝撃から離れてしまう。むしろ美文や演説にたよることなく、肉体の単純な生々しさ感じる方が良い。沈黙は金。

「ブドウを吸いたまえ、しかしお願いだから、その話はしないでくれ」

自分が話をしているのを聞いて突然感じるあの困惑を君も僕と同じくらい知っているだろう。真実にむかって静かな小道を歩んでいたその時に、突然真実からあれほど遠くなることを。幸いなことに、日本の書き言葉は、理屈をこねたり、長々と説明をするたぐいのものではない。書かれた文章の意味は見れば一目瞭然だ。

ところで、書く と 絵を描くとは同じことば、「かきます」。同じニュアンス。

心から、

エリック

娘 rrespondence VII.

オリビエ、

京都、2001年8月14日

今日は京都の西にある大山という標高約1730mの山に上った。地理学的には若い山で、山腹は若い女性のそれのように切り立っており、上ると疲労し、息が切れる。

大山はもともと古来からの多くの神社が連なっているところで、神社の周辺には古い石や文字がすりきれて読み取れない墓石がみられ、巨大な百年以上の木々の根元には苔がむしっている。

あちらこちらで、全てを濡らす水の音がし、水浸しの光景となる。過去がよみがえり（それとも僕が行ったのか）その深底から時間が吐き出したような「美しい」石をじっとながめっていると、僕は石に内在する時空を越えた「存在の静寂に」捕らわれる。いつまで続くともわからない濡れた山道を歩いた末、越上山（おがみやま）寺へ着く。この寺はまるでとらえ所のないもの、クールベの言う「世界の起源」、あるいはニューマンの言う「ジップ」の上に開かれた脚のように現れ、灰色の木材でできている。指で撫で、触り、叩いたりしたのだろう、木のえぐれている部分から木材は指でこすられてつるつるになったことが分かる。

「私は草の上に横になった。平らな石の上に頭をのせ、天の川を振り仰いだ。星の精液と天の尿が星座の天空を横切るようにうがった不思議な穴。この天頂に空いた亀裂は無限の広がりの中できらめくようになったアンモニア蒸気がどうも形成しているらしい。静まり返ったなかに響き渡る雄鶏のさけびのようにアンモニア蒸気は虚ろな空間の中で引き裂きあう。卵、えぐられた目あるいは石に張り付いた輝く私の頭がい骨は、相似形の映像を無限に送り返し続けた。吐き気がする」 眼球譚 p. 136 ジョルジュ・バタイユ

それらすべてのジャングルは純粹すぎてそのため墮落しているが、その奥には巨大な丸い鐘がある、冷たい水で手を洗った後、横に着いている棒で鐘を突くと空洞の音が響き渡る。叫びをあげたいと思っている神の神秘的なクリトリスのようだ。

僕はあっけにとられていた。

友情をこめてエリック

娘 rrespondence VIII.



モーリスへ、

東京、2002年6月25

日「義務感」は日本人意識の非公式な崇拜の対象であることは確かで、常に容赦なく、静かにそれが感じられる。

命令としての辛辣な明確さを決して持たず、我々が従うところの率直な必要不可欠な命令からは遠く離れ、むしろ個人的な直感によってせざるを得ないと感じるのだ。

師や第三者が罵倒するわけでもなく、「義務感」は日本人達の意志の狭間に、社会から生え出るにまかせたものであり、それに日本人達は制約される。

「社会が文明によって獲得したものは個人の自由を大幅に制限してえられた」とシュテファン・ツヴァイクは語っている。日本がそれだ。全く文明化され、自らの島に原住民にだけで閉じこもっている。

ラテンそしてヨーロッパの思考の基本が、サド、デイドロ、シュテファン・ツヴァイクにいたるまで、ほとんど「ノー」と言わなければならない所にあるのに対して（私たちにとってはそれによって自由という言葉がもつべき響きを持ってくる）、日本の思考の基本は「はいという義務」であるかのようだ。

要するに、カフカの作品中のK.が日本人であったなら、自分の罪を認めたことだろう。このように、この二つの文化の意図の相違からは、避けられない、尽きることのない無理解が生まれる。それが相互を引きつける理由でもある。「ノー」と言うことで、個人は協力的な道具には決してならないことを主張しているのだと僕は思う（社会は元来個人を協力的道具にしたいとの希望を持っている）。1943年に歯を仕分けしていた父親達のように、産業革命以降、連続しておぞましいことが起こってきたからだ。

日本人は屈折した自尊心を隠しもせず、自分は「我慢する」という。これは「自分で引受ける」というような意味だ。だからといって、どこまで自分以下でいること受け入れるのか。自分でないことを、はっきり言って非人間的になることを、そこに救いがあるとする彼らを見てどうして啞然としないでいられるだろうか。少なくともそれについては、大和の熱狂的信奉者の超自我こそ「現代」社会が産んだ最も恐ろしい亡霊だといえるだろう。

心から友情をこめて。

エリック

\* Lacan`s psychoanalytical term.

## 娘 rrespondence IX.

親愛なるOへ、

東京、2002年2月3日

日本人が一人称で話をすると、断定文を「が」や「けれども」あるいは「けど」のような前置詞で終える。それをフランス語に訳すと「mais」と訳せる。

「mais」これはなんと美しい態度だろう。

そして日本の文化全体を予見させるような態度だ。アジアのはるか端の島の言葉。つましきから何事をも断定せず、この何気ない言葉を文章の最後につけることによって全てを取り下げる。

とはいえ、西洋人である僕はこの「けれども」のあとに続く文章を待ってしまう。

けれども、なに？

けれども何も無い。

ただ、宙に浮いているだけ。

今言われたばかりのことに意味が怒濤のように押し寄せ、相手に到達した時には宙づりの沈黙となる。

突然、相手に到達しきらないまま、自分を守る、日本人の孤立、気づかいの孤独。

自我なくして話をすると、それは一方的に述べること？

サミュエル・ベケットのことが頭に浮かんでしまう。ベケットは「名付け得ぬもの」の中で、「そう、私の人生、そう呼ばざるを得ないもの、の中で、3つの事があった：黙ることができない。しゃべることができない。そして孤独、もちろん肉体的な孤独。それらの中でぼくは何とかしてきた。」と語っている。

誰もそこにはいない会話。周りをぐるぐる回る対話、周辺だけをなぞる交流。

ラテン系の人間、西洋から来た人は（ここでは「洋」と表される。「海」を意味する漢字だ\*）生来アゴラの市民であるのに対して、日本人は目上の人の前で腰が低く、西洋人が正当化するこの自発性をうまくすり抜ける。

フランス語は外交的な言語だと良く言われる。礼儀作法の心得のあるフランス語を話す人は何らかの攻撃的態度に応える方法として、極端に丁寧な表現を使うことがある。（その丁寧さが攻撃を隠し、極端であることで、攻撃していることを誇示する）。

日本語は天子の言葉。丁寧というよりももっと儀式張ったもの。話している内容とはほど遠く、聞いている内容をおし隠す。まるで紫式部が屏風の後ろで、兄弟が受けている教えを漏れ聞いているようだ。

心から、

\*多分、オランダ船との最初の出会いの場所だったのだろう。海は人気のない場所だが、風がひっきりなしに吹き渡り、恐ろしいほどに動きがある場所でもある。これ以上に「別の人」（別の言語を話す人）をうまく表現する言葉があるだろうか？

## 娘 rrespondence X.

今日はピエール、

東京、2001年9月17日

音達は不器用に僕の鼓膜をたたいては、外に徘徊しに行ってしまうていた。まるで空の瓶から遠ざかってゆく酔っ払いのように。それらの音が少しずつ言葉に変わってきた。日本語は僕の所まで、長い道のりをやって来た。今までは推測するにすぎなかった文章の意味内容が脈々と、まだ中身の空っぽだった記号に過ぎなかったものから流れ出した。

しかし推し測ることほど美しいものはない。学ぶことは、とどのつまりおぞましい。今までは推し測るに過ぎなかったことを征服する、それは花の薫りを思い描くこともせず、いきなり花の匂いを「かいで」しまうことに等しい。それはとりもなおさず、薫りを手に入れるには犯さずにはできないということ。

ただ、思い描くためには最低限の知識は必要ではないか。かといって「知り」過ぎていては推し測ることはできない。薫りにうっとりせずに、薫りを思い描くだけではしかしそれが一瞬のことであるにしても、犯罪ではないか？

そして犯すことは、美を新たに汚す可能性を枯らしてしまうことではないか？そして経験、生きてきた事をつぶやき、芸術のあらゆる表象と真実の本質については何がいえるだろうか？

だからこそ、花であれ、言語であれ、推測の域にまで押し進み、思い描くことの軽妙さを大いに楽しみ、絶望しながらもその大義を手に入れ、それを窒息させなければならぬのかもしれない。

芸術が言えること。言わなければならないこと。どうやって、こんなにわずかな静寂の中で生きていけるだろう。

返事待っています。

エリック